

「成田東の街づくりを考える会」(133号線の会)主催の、杉並区在住の建築史家、陣内秀信氏の講演会に参加しました。

会場の杉並第二小学校体育館に、94名の近隣の方々が集まり、熱心に聞き入りました  
以下、講演の概略(漏れているものも多々あります)を記します。

イタリア建築史が専門の陣内氏の話は、主にイタリアを主とするヨーロッパの都市と、日本の都市とを比較しながら進められました。

1960年代伊

ボローニャから、先進国の街づくりの転換が始まった。郊外に拡大するのではなく、コンパクトに質の高い街づくりを。

「街に住む」という概念が生まれる。

ローマ市も車に占領されたが、ナヴォーナ広場から車を追い出し、開放感溢れる広場を取り戻した。ヴェネツィア、車の無い都市の快適さで子供達の天国。フェッラーラは、自転車が盛んで人が主役の街。ナポリも車を追い出し歩行者化で治安も良くなった。

1970年代

国際的な研究機関の「ローマクラブ」が1972年「人類の危機」レポートで、資源と地球の有限性に着目して、100年以内に成長の限界に達すると提言した。ここから、価値の転換が始まった。

当時の長洲神奈川県知事は1978年、「地方の時代」を提唱。以来横浜市は街づくりのパイオニアになる。

1980年代の東京

渋谷はパルコを中心としたポストモダンな街。

原宿は明治神宮の門前町的アイデンティティ。

代官山、建物の高さを抑えて、緑豊かな総合的な街づくりに成功する。

谷中・根津・千駄木(谷根千)、神楽坂は個性豊かで回遊性がある魅力的な街になる。

この年代から、山の手に文化的アイデンティティを探るようになる。

1980年代後半から1990年代の日本と伊

日本はバブル経済に突入し、一極集中で混乱し、伊とは逆の方向に進む。

その後、都市再生を模索始める。都市農業の重要性が見直される。

ヨーロッパでは「スローフード」というライフスタイルの革命、「チッタスロー」(ゆったりした街)という都市のあり方を問うようになる。

杉並の歴史と現状と方向性

●水の街杉並、妙正寺川と善福寺川、神田川の3本の川が流れており、水辺に縄文の遺跡。

●西荻・阿佐ヶ谷・高円寺の商店街の魅力は、大資本が入らないローカルな街だから。

職住一体の町屋が形作る「商店街」は、日本独自のもの。大切にしなければならない。

●パールセンター、すずらん通りは元々鎌倉古道。中杉通りができたおかげで、パールセンターとすずらん通りという車の入らない道が出来た。しかし延伸する133号線は全く要らない。

更に、五日市街道以南の善福寺川緑地を通る

道路計画は、緑豊かな杉並にもとるもので、不要な道路と自分は思う。

●バルセロナでは、スーパーブロック計画という、車道の使い方を市民で決めるというシステムがある。

●「15分コミュニティ論(徒歩15分圏内に学校・病院・買い物等全てがある)」というのがあるが、期せずして、杉並はまさにそのような街である。

杉並の目指すべき方向

成熟社会

ローカルな良さ

程よく古さをもつ

大規模開発がない

お互いに顔が見える小さな店が多い街

緑・水・樹木・都市農業の豊かな街

アーバン(都会)とルーラル(田舎)がうまく融合している街

子育てしやすく、高齢者も暮らしやすい街

豊富な資料と写真、長年の見聞による分かり易いお話で、あっという間の1時間半の講演でした。杉並区の街づくりについて、私達住民のこれまでの主張に自信が持てる内容でした。

丸山 ちみ